
うたびと

ねもやん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うたびと

【Nコード】

N3545D

【作者名】

ねもやん

【あらすじ】

時代が魔法の時代から科学の時代へと移り変わろうとしている世界。そこで、一人の水売りと、「うたびと」と呼ばれる巫女が出会う。時代の大きな流れの中で起こった、小さな小さな物語

かつて、この国がまだ、小国の集まりだった時代。

神は人とともに住み、人ともに歩んでいた。

神の声は絶対であり、神と会話をできる巫女は神と同等の地位を持っていた。

しかし・・・時代は進む・・・。

産業革命。

後にそう呼ばれる、石油機器の発明。

そして、爆発的に起こる産業化・・・軍事化・・・。

これは、そんな時代の変わり目の物語。

そうだ・・・。

この物語を始める前に説明しておくことがあった。

人と神をつなぐ存在・・・巫女についてだ。

なぜ神は『彼女』たちとだけ、交信を許されていたのか・・・だ。

その理由はいたって簡単。

神は・・・彼女の『歌声』が好きだったのだ。

巫女は彼女たちの『歌』のみによって。その交信を許された。

ゆえに、彼女たちは別名こつも呼ばれている・・・。

・・・うたびと・・・と・・・。

「なあ、おじちゃん水買ってくれよ。水。」

そこは小さな村だった。

線路も電車もここまでは届いておらず、まだ農業によって成り立っている小さな町。

産業化に乗り遅れたことを『緑豊かな村』といい逃れることで、何とかプライドを保っている・・・そんな村だった。

「水だ？そんなもの？近所の川にいけばいくらでもあるだろう？何で買うんだよ？」

その中にある小さな酒場。

少年が、その町に来たのは真夏の太陽がさんさんと照りつけるとも暑い日だった。

カウンター越しに立っているのは店の主人。

髭が濃くてとてもがっしりした体格をしている。

右目は刀傷でつぶれており、半そでから見える腕にはいくつかの銃痕が見て取れた。

おそらく、元軍人、足か腕かをやられて前線で戦えなくなり、里に戻って酒屋の主人に落ちぶれた。

そんなところだろう。

それにしても、こんな真昼間だというのに、客で溢れかえる店内。こんな時間から酒屋が繁盛しているというコトは、それだけこの村が荒廃していることの現れであるのだが、少年にしてみたら知ったことではない。

「違うよ、ものが違うんだよ、ただの水を商売道具にするかよ？いいから、一口飲んでみてよ。」

口にしながら、少年は重たそうに抱えているショルダーバッグから水筒を一本取り出す。

今のご時勢となつては古い形となった竹の筒を利用した水筒。保温性も低く、こんな暑い日では、あつという間にぬるくなってしまうだろうに、その水筒からは冷気が漂っていた。

「これは・・・？」

店の主人の表情が変わる。

水の登場に驚いたのではない。

この暑い中冷気を放つ竹筒が、真夏のクソ暑い酒場という光景の中では、あまりに異質だったのだ。

先ほどまで静観を続けていただけの客たちも、この竹筒の登場に様に珍しそうな顔を向ける。

「ほお・・・また、古い魔法を使う坊主じやの・・・。」

客の一人である、老人がそれを見ながら、ぼそりとつぶやいた。

「魔法なんかどうだっていいよ。とりあえず水を飲んで欲しいんだよ、俺は！」

しかし、少年はそんな魔法なんてどうでもいいらしく、店の主人どころか、客にまで水を勧め始める。

こんな光景を目のあたりにしては、少年が差し出す水を飲まないわけには行かない。

店の主人は、恐る恐る少年が差し出した水を一口なめる。

「・・・・・・うまい。」

それは、おそらく主人が考えていた言葉とはまったく逆の言葉だったのだろう。

それを口にした主人の顔が苦虫をつぶしたように変わる。

おそらくは、『まずい』と言って押し返したかった計算が狂った。言わなくても、表情が語っていた。

しかし、それに対して少年の表情は一気に変わる。

「だろ！ここから3000フィート離れたアルタス山脈の蒸留水だぜ。分かったなら、買ってよ、一本20ギルにまけるからさ。」

目を輝かして、一気に詰め寄る少年。

強面で下手をすれば、片手だけで人を殺せそうな腕を持っているというのに、怖さ知らずといわんばかりだ。

ちなみに、20ギルとは、平均的な馬のえさ一日分の値段と一緒に物が『ただの水』というコトを考えれば、分からない値段ではない。

「アルタス山脈、お前そんなところから来たのか？」

しかし、店の主人はまったく別のことに興味を示したらしい。

というより、もしかしたら話をごまかして何とか、先ほどの『うまい』発言をややむやにしたいのかもしれない。

「もう・・・俺がどこから来たかなんて関係ないだろ！俺は水を買って欲しいの！水、水、水！！」

しかし、少年にはそんな方法は通用しない。

彼の頭の中にあるのは『水』のただ一点だけだ。

「分かったよ・・・買うよ。とりあえず、客の分と合わせて、30本おくれ。」

結局、根負けしたのは店の主人のほうだった。

「へへっ・・・まいどありっ・・・おっちゃんありがとね。」

言っと、少年は大きなショルダーバックの中から、水筒を30本取り出し、600ギルを受け取ると店を後にしていった。

「あいっ・・・もしかして・・・。」

少年が去っていった後に主人が口にした言葉。

「ああ・・・一度、巫女さまと合わせたほうがいいかも知れぬの・・・。」

答えたのは、先ほど少年の不思議な筒を見て、一発で『魔法』と見抜いた老人客。

しかし、そんな言葉を発するときには、既に少年はコノ店から遠ざかっていた。

「あゝあ・・・正体ばれちゃったかな・・・まあ、いつか・・・。これだけの金があれば、次の村ぐらまでは持つし・・・。」

店を後にして、少年は村の端にある野原で先ほど受け取った金と今までの旅行で溜めた金の精算をしていた。

合計2000ギル。

これで次の村に行くというのだから・・・。

「はぁ・・・今日も野宿だ・・・。」

ため息とともにクビを傾げるが、仕方がない。

宿に泊まるうと思つたら、最低でもこの倍の金額は欲しい。

だからといって少年の売り物は、所詮は何の変哲もないただの『水』

40ギルに値上げして、誰が買うというのだろうか・・・。

「あゝ、温かいベッドが恋しいゝ！」

とりあえず、願望を声に出しながら、野原に横になってみた。

「だったら、家に来る？」

返事は少女の声だった。

「え？」

まさか、返事が返ってくるとは思わなかった、少年は予想外の出
来事に、少年はあわてて腰を上げて、周りを見渡す。

誰・・・？

「フッフ・・・先ほどから、考えていること全部口に出すんだもの。
聞いていて何度も笑いそうになっちゃったわ。」

そこにいたのは、少年と同年代と思われる若い少女。

長い金髪に、大きな青い瞳をしておりソバカスが頬の周りにちり
ばめられている。

彼女のまとうている白い布地をしたワンピースには、たくさんの
装飾が施されており、一見すると、豪華絢爛な服装をまとったお嬢
様のようにもみえた。

「・・・だれ？」

とりあえず、真つ先に口にするべき質問だった。

「あら？レディに名を聞くとときには、自分から名乗るのが紳士のた
しなみでしょ？」

クリクリとした瞳でこちらを眺めながら、愛らしい笑顔を向ける
少女。

「・・・思わず自分の顔が高揚したのが分かった。」

「先に声をかけたのは、そっちなのに・・・。」

とりあえず、自分は商人であって紳士ではないよ・・・という言葉は伏せておいた。

「それでも、名乗りは別です。」

「厳しい女性だ・・・。」

「ああ・・・それじゃあ、俺の名前は『スイ』」

「仮名ですか？」

「鋭いな・・・。」

「本名は長くて俺も覚えていないんだよ。」

「事实は違っていたが、さすがに人前で名乗れるはずがないのだ。」

「北の民の証である『スイートウォータ』の名を持つ者は、決して外部では名乗ってはいけない・・・。」

「たとえば、この世で『北の民』が自分ひとりになってしまおうと・・・。」

「そうなんだ・・・それじゃあ、私の名前はミクでお願い。」
なるほど。

「そっちは、本名だろ？」

「読心術？」

「嘘をついているか、どうかぐらい顔を見れば分かるよ。」

「というより、ただの勘・・・。」

「当たったようだから、このまま黙っていよう。」

「だって、仮名を使わなくちゃいけないほど、やましい人生は送ってないもの。」

「言われた・・・。」

「何となく言われなくないと言われた！」

「でも・・・。」

「俺だって名乗りなくて名乗ってるわけじゃないやい。」

「悔しいから反論してみた。」

「それでも、親からもらった名前を大切にできない人生なんて悲しいよ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「そうだな・・・。」

反論ができるはずがなかった。

自分だって、本当は大切にしたかったんだ。

ただどできなかった。

名乗れば・・・殺されるから・・・。

この名前を持つ者は、生きてはいけなかったから・・・。

。

俺だって、できることなら自分の名前ぐらいは誇りを持ちたいよ。

・・・。

「あ・・・・・・・・ごめんなさい・・・そんなつもりで言ったわけじゃないのだけど・・・。」

突然あやまれた。

「別にいいよ。言われ慣れているから・・・。」

そうさ・・・仮名を名乗るなんて犯罪者か『魔道師』だ。

どちらも、世間に顔向けできる人間ではない。

どちらにしたって、俺はまともに世間に顔向けできる人間ではな

いんだ・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

しかし、ミクと名乗った少女はスイの言葉に罪悪感を感じたらしく、しばらく顔をしかめていたかと思うと、突然表情を険しくして立ち上がる。

「いや、本当に気にしていないから・・・。」

「口でも言っても、顔では言っていないよ。待ってて、せめてもの償い。」

そういうと、ミクは息を吸い込み・・・。

そして・・・

・・・・・・・・歌いだした・・・。

天使が大空に舞い踊る。

神がそれを賛美する。

天は地を暖め、花を咲かして、我らの心を潤すだろう。

罪深き人よ。報われぬ人よ。死すべき人よ、

悲しき人よ。涙流すべき人よ。絶望に打ちひしがれし人よ。

せめてもの花を。

美しき花を。喜ばしき花を。幸福に満ち溢れた花を。

せめてもの花を。

母なる花を……。

その歌声はとても透き通って、スイの心の奥底に響くほどに美しい音色だった。

人の声とはここまで美しいものであるのか……。

初めて感じるその歌声に魅了され、スイの瞳から思わずあふれ出るのは一筋の涙。

悲しかったのではなく……だけど、ただ涙せずにはいられなかった。

あれ？何で泣いているのだろう……？

………って……

「花が……咲いている……。」

その光景が、スイの涙をとめた。

突然彼の目の前に広がるのは、ミクを中心に変わり行く野原の風景。

一面、緑だった景色に、赤や黄色の花々が咲いてきていたのだ。

まるで、この歌声に答えるかのように……。

花は心を潤し、一時の安らぎをあなたに与えよう。

悲しき人よ、死すべき人よ。報われぬ人よ。罪深き人よ。涙なが

すべき人よ。

せめてもの安らぎを。

せめてもの、救いを与えたまえ。

歌はここで終了した。

彼女が歌い終わったとき、あたり一面には花が咲き誇っていた。それはまるで、彼女の周りだけが春になったようだった。

「うたびと？」

思わず、口に出ていた。

歌を通し、神々と会話をして、奇跡を起こす巫女。

古き伝統がある、大きな村や街ならともかく、まさかこんな田舎の小さな村にそんな存在がいるなんて……。

「なりそこないだけだね。」

言っと、ミクはへへッと笑った。

確かに、うたびととしては、彼女の咲かした花の数はあまりに少数。

本当に彼女の周り程度だった。

「それでも、すごいよ。こんな若くて、綺麗なうたびとなんて俺始めてみた。」

「ありがとう。そういつてもらえると嬉しいよ。」

言っと、少女は再びその場に腰を下ろす。

「でも、うたびとがいるなんて、思った以上にいい村だったんだな。」

「

うたびとがいるということは、それだけ、コノ村には伝統と格式。そして、お金があるというコト。

すっかり、寂れて小さな村だと思っていたが、勘違いだったらしい。

「昔はね……。」

それを口にしたとたん、ミクの表情が曇る。

「……あれ？」

「昔？」

「そう、お母さんはね……きちんとした『うたびと』だったの。」

だけど、お母さんが死んで私がうたびとを引き継いでからは全然ダメ。最初に言ったでしょ。私は『なりこそない』なの。」

それは、ミクが見せるとても悲しそうな表情。

「……なりそこない……」

その意味を分らないほど、スイも無粋ではない。

力が余りに未熟なのだ。

うたびとの役割は奇跡を起こし、村を活性化させる。

農作物を育て、災害を遠ざけ、争いを鎮める。

あたり一面に花を咲かせる程度の奇跡ならそこらへんにいる『魔道師』だつてやってのけるだろう。

「……未熟なうたびと。」

自分がこの村のうたびとになってしまったため、この村は寂れた。……すべて自分のせいなのだ。

彼女の表情が言っていた。

「……」

「……なあ、ミク、さっきの歌もう一度歌ってくれな
いかな？今度はこの水を飲んでさ。」

言いながらスイは商売道具の水筒を一本取り出し、ミクに渡す。

「水？」

「いいから、騙されたと思って。」

言われて、恐る恐る水筒に口をつけるミク。

「美味しい。」

先ほどの主人とは違って、素直な言葉だった。

当たり前だ、まずい水なんて商売にはできない。

「だろ？いいから、これ全部飲んでから歌ってみてよ。きっと変わるから。」

スイは笑顔を向けて、何気に左手を地面にかざした。

ちよつとした禁忌魔法。

だけど、咎めるものは生きてないし……いいよね、こういう使い方なら……。

言うが早いが、スイは地面にかざす左手に意識を集中させる。
探し出すのは、地下水脈。

・・・・・・・・・・流れろ、水！

・・・・・・・・・・そして、ミクの歌声が響き渡る。

悲しき人よ、死すべき人よ、涙流すべき人よ・・・・。

せめて・・・・・・・・・・美しき花を・・・・・・・・・・。

「！」

驚いたのは、他でもないうたびとたる、ミク本人だった。
当たり前だ。

先ほどまで自分の周りにしか咲いていなかった花が、今度はスイ
のところはおろか、目線のはるか先まで咲き誇っている。

今度はミクの周りだけではない。

本当にこの地域一帯に春が訪れたのだ。

「すごい・・・・。」

「本当は自然系統を狂わすから、やつちやいけないのだろうけどね・
・・。ミクの力はすごいよ。」

力を使いすぎたせいで、一気に疲れをスイの身体を襲う。
しばらくはココからは動けないだろう。

「それだけじゃないでしょ？ いったい、どんな魔法なの？ 魔力増幅
とか？」

興味心身に効いているミク。

「そんな野蛮なものじゃないよ。秘密はミクの喉だよ。」
「喉？」

「そう・・・・ここに来る前にミクたちの村の川を見せてもらったけ
ど、大きな魚が一匹もいなかった。」

「それが、何の関係があるというの？」

「下流なのに、大きな魚がいなくて事はそれだけ川の水が汚れているんだよ。あんな水で生活していたら、自然と喉だってやられてしまう。」

うたびとは、喉が命。

汚れた水は、大切な巫女の喉をつぶし、やがて村を滅ぼすだろう。
・・・水を粗末するものは、命を粗末にしている
と同罪じゃ。

そうだな・・・長老・・・

「だって・・・ここは帝国より下の村だから・・・。」
目をうつぶせ、悲しそうな表情を見せる、ミク。

・・・仕方ない・・・

こんな小さな村ではどうあがいても無駄。

・・・帝国の言いなりになるしかない・・・

その表情が言っていた。

「・・・知ってるよ。だから、こうして俺が水売っているのだろう？」

産業革命だが、なんだか知らないが、たくさんの機械と武器はそれだけ川を水を汚す。

酷いところでは水が赤くそまっていて、魚が一匹もいなかった。

・・・そんなもの、既に川と呼べる代物ではない。

「だから、どうしようもないんだよ・・・村長が言っていた。コ

ノ川はもうダメだって・・・川がダメだと、村がダメだって・・・

。

悲しそうなミクの表情。

おそらく、彼女もことなく自分の歌声が未熟な理由は分かっていたのだろう。

そして、それがコノ村にどのような末路を用意しているのかも・・・

「空と同じ色をした水は人を生かす。だけど、赤い水は人を殺す・・・
黒い水は国を壊す・・・。」

「え？」

「俺の村に古くから伝わる伝承だよ。水は空と同じ色でなければいけない。青空の下では青い水を、夕焼けの空の下では赤い水を、漆黒の闇夜では黒い水を……。水はそうでなければいけない。」

「ただど……。帝国が、機械が、武器が、戦が、それを汚した。水を赤く染め、黒く染め、人を殺し、国を壊した。」

「だけどそれを咎めるものは誰もいない。」

「咎めるべき……。俺たちの民は……。滅ぼされたのだ……。」

「おい、ミク様……。こんなところにいたのか……。ってなんだコノ花？あ、あと水売りさんまで、ちょうどいいところにいた。」

「二人の大切な時間は、突如現れたヒヨロヒヨロの男によって邪魔された。」

「長身で痩せ型、幸薄そうな顔はどこなく親近感を覚えてしまう。」

「どうしたの？ミリト？」

「ミリトと呼ばれた青年に返事を返すように、立ち上がるミク。」

「今、帝国軍の連中がコノ村に……。なんでも『うたびと』を差し出せとか……。」

「！」

「！」

「その表情に驚いたのは二人同時。」

「思うところはただ一つ。」

「まさか……。『うた狩り』？」

「そんなことがあるはずはない。」

「いや、でも十分に考えられることだった。」

「産業化が進む、帝国軍にとって奇跡を起こす『うたびと』は正直邪魔な存在。」

「だから、各国のうたびとを捕らえ、己が作った武器で公開処刑をする。」

「……。自分たちが作る『産業』がどれだけ優れているの

かを、証明するために。

殺される前に、処刑官は尋ねるのだ。

『殺されたくなければ、奇跡の歌とやらを歌い、コノ場を回避し見せるのだ。』

・・・ただの噂話だが、火のないところに煙は立たない。

「だから、ミク様はとりあえず非難を・・・あとついでに水売りさんも・・・あんたも帝国軍に見つかったらまずい立場だろう？」

・・・ばれていたのか。

そりゃ、酒場でアレだけのデモンストレーションをして見せれば、バレもするか・・・。

「ありがとう。ミリト・・・それで、私たちはどこに行けば・・・。

」
そこまで口にした瞬間だった。

「その必要はない。」

声が聞こえた。遠くからだけど、こちらにもはつきりと聞こえる声。

威圧的な若い男性のものだ。

顔を向けると、そこにいたのは銀色の甲冑に身を包んだ、一人の若い騎士。

黒い巨大な馬に乗っており、剣の他にも腰には最新鋭のピストルという武器が見ることができた。

「どうも、怪しいと思い、コノあたりを散策してみれば案の定だ。貴様がこの村のうたびとか？」

馬から下りて、ミクの前に立ちはだかる騎士。

身長、体格からして、さっきあった酒場の主人ぐらいだろうか。ただ、目つきは先ほどの主人より数倍は悪いな・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ミクもスイ、ミリトも返事を返さない。

当たり前だ。

こんな高圧的な態度でせっかく咲かした花を踏み荒らしたお前なんぞに、どんな言葉で返事を返せるというのだ。

「まったく・・・これだから、田舎の民というのは・・・それにしてもすごい花だな。この暑さでは数時間で枯れ果ててしまうというのに、可愛そうなことをするものだ。」

騎士は踏み荒らした花を眺めながら、呆れたような声をあげる。

いや、実際に呆れていたのだろう。

なんて無駄なことを・・・。

花を咲かす力を人を殺す力に変えることもできるというのに・・・。

その表情が言っていた。

「それでも、ここの野原の花はまた春になれば、息吹を返す。永遠に花の咲かない野原を増やし続けるアナタたちより、よっぽどましよう。」

先に口を開いたのはミクだった。

挑発的な物言い。

危険だが、とめるつもりはない。

自分も、まったくの同意見だったからだ。

「花で腹は膨れんよ。返事ができるなら、質問に答えろ。お前がうたびとだろう？」

「花の美しさを知らない人間は幸福を得られないぞ、火の民。」

返事を返したのはミクではなく、スイだった。

いけ好かない。

とことんいけ好かない。

ミクが挑発した。

だけど、喧嘩を買うのは男の仕事だ。

「なんだと・・・貴様、今なんと言った。」

男の表情が変わる。

当たり前だ、お前たち帝国を名乗る民にとって、この名前は禁句

に近いだろう。

「ただ、俺から言わせればその名を捨てたお前たちに、誇りはないんだよ。」

「何度でも言つてやるよ。火の民『ファイヤークォール』おのれの使命を忘れて、火のありがたみを捨て、神に反旗を翻した愚か者だ。」

スイたち、『北の民』と相反する民族。

それが、南の民、別名『火の民』だった。

水を崇拜する北の民とは対照的に彼らは火を崇拜していた。

火は、命の源、光の根源。

暗い世界に明かりをともし、冷めた身体を温め、心と身体に潤いを与えた。

長老が言っていた。

火の民は我々『北の民』同様、誇り高き民族だった。

しかし、どここの馬鹿が『機械』などという、ワケのわからないモノを作り出すから・・・使命を忘れ、火の恐ろしい一面しか見えなくなつたのだ。

人を燃やし、街を燃やし、国を燃やす、破壊の象徴。火。

そんな火の一面に捕らわれてしまうから、お前たちは『帝国』なんて馬鹿げたものを作り上げてしまったのだ。

「貴様・・・その名は我々に対する愚弄だぞ！この誇り高き騎士がラドに向かつて！」

「火の民は火の民だ！おとなしく暖炉の番人でもしている！」

一度外れた関は止まることを知らず、スイの口からあふれ出る。当たり前だ。

黙っていたが、スイはこいつの顔を知っていたのだ。

幼い頃、自分の村を焼き払った張本人。

母を焼き、父を殺し、村を襲った。

本当ならば、殺してやりたい。

許されるならば、今すぐコノ場でこいつを殺してやりたい・・・。

「貴様！ゆるさん、名誉のために貴様は死ね！」

言うが早い、ガラドと名乗った騎士は腰につけていたピストルをスイに向ける。

おろかな……。

火の民はその炎こそを最大の武器だったはずなのに、そんなオモチヤに頼ってしまうほど落ちぶれたのか……。

「させるかよ！」

ピストルの原理は不明だ。

しかし、相手が火の民である以上、彼の持つ武器が『火』を原動力とすることは用意に想像がついた。

だから、スイの方が動きが早かった。

一瞬にして水浸しになるピストル。

空中にある水分を一気にその場に集中させたのだ。

先ほど花を咲かせるために、エネルギーを使い果たした感はあるが、ここで踏ん張らなければ男じゃない。

ああ、喉が乾くな……。

水の使いすぎだ。

「なっ……。」

驚いた声と表情を上げるガラド。

炎は水に弱い。

案の定、ピストルはカチャカチャと音を立てるだけで、そこから何も動きらしい動きはなかった。

「オモチヤではなく、きつちりと貴様の流儀で戦って見せろ、火の民！」

お前の武器は炎のはずだ。

俺の武器が水である以上、お前はそれを使うしか俺に勝機はないはずだぞ。

「まだ言つか、貴様あゝ！」

しかし、ガラドはピストルを腰にしまうと、今度は剣を抜きさる。
「……魔法すら忘れたのか……お前たちは……。」

落ちぶれた。

本当に、こいつらはどこまでも落ちぶれている。

産業だが、機械だが知らないが、火を忘れ、自然の大切さを忘れ、おのれの使命を忘れた火の民よ。

お前たちなんかに、俺たちの村が滅ぼされたのかと思うと、本当に報われない。

誰も・・・報われない・・・。

「覚悟しろ、下郎！」

全身で怒りの表情を浮かべ、剣を振り上げるガラド。

「うるせえよ！愚か者！」

勝負は一瞬。

ガラドの振り上げた剣はおろせない。

当たり前だ。

ガラドの剣を持つ手は・・・・・・・・凍り付いていた・・・・・・・・。

「まさか・・・そんな馬鹿な・・・北の民は滅びたはずなのに・・・」

ようやく気がついたのか・・・遅すぎる。

「火の大切さを忘れるどころか、『火の民』と呼ばれることすら否定するお前には、俺たちを倒すことなんてできない・・・うたびとを恐れていたんだってな。」

馬鹿馬鹿しい・・・。

おのれより強いものを敬うことをせず、ただ怯えて殺すだけ。

それが、産業だというのであるなら、それはあまりに馬鹿げている。

お前たちだって、かつては知っていたはずなのに・・・・・・・・。

「騎士候様。あなたの負けです。ここで私とスイが協力すれば、私が今コノ場で『死の歌』を歌ってあげることもできるのですよ。」

最後に閉めたのは、ミクだった。

ありがとう・・・・・・・・。

ごめん、実は限界だった。

水を発生させるだけじゃなくて、凍らせるなんて……。

パワーを使いすぎて、もう立っているのもやつとだよ……。

「貴様たち……覚えているよ！」

ガラドはそれだけを口にする、コノ場から立ち去って行つた。

振り上げた剣をそのままの姿勢で、しっかりと馬を従える技術だけはすごいと思つたけど、それだけの器用さがあるなら、魔法の一つも覚えておけよ。

本気で民族の血が泣くぞ。

「ありがとう……スイ。だけど良かったの？」

立ち去つた後にミクが声をかける。

「ん？」

「あんなに派手に魔法を使っちゃって……たぶん……。」

うん、分かつてる。

「俺もお尋ね者だろうな……。」

北の民は滅びなければいけない。

帝国の敵だから。

帝国を脅かすものだから。

俺たちは、生きていることそれだけで罪人なのだ。

だけど……

「しょうがないよ。今に始まつたことではないし……それに、元々宿無しの自由な商売人。逃げるついでに、次の村にでも行つて、水を売らないと。」

立っているのもつらいけれど、コノ村にとどまるわけには行かない。

正体がばれた。

追つ手も来るだろう。

あんなヘツポコ騎士ではなくて、本格的な剣士や魔法使いが攻めてきたら、さすがにスイも太刀打ちできない。

逃亡生活は今に始まつたことではないが、スイにはそれ以外の生活は許されていなかった。

商売道具のかばんを持ち上げ、遠くを眺める。

とりあえず……西に向かってみるか……。

もしかしたら『海』なんていう、でっかい水溜りも見れるかも知れないし……。

「ねえ、また会えるかな？」

ミクの言葉。

別れの言葉。

「まあ、生きていれば会えるだろうさ。」

そう、生きていれば再会の可能性はどこまでもある。

今生の別れなんてどこにもない。

水が、火が、風が、土が、きつと俺たちの願いをかなえてくれる。

神の恩恵を忘れず、生きていることを感謝せよ。

北の民……そして火の民に古来より伝わる伝承。

だから、願えばまた俺たちは再会できる。

「そっか……それじゃあ、またねだね。」

ミクが笑う。

ミクが笑ったからスイも笑った。

「ああ、またねだね。」

こうして旅人は再び旅に出る。

水を持ち、新しい国へと向かい……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3545d/>

うたびと

2010年10月8日15時07分発行